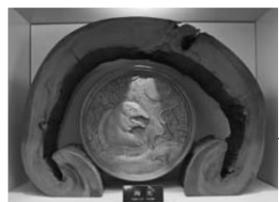




品格を生む木目がいい木ほど硬く、作品創りに時間と苦勞を要するという。彫る側の気迫と根氣、技術の格闘が作品の魂となる。



作品名「海光」(かいこう)

広川さんの作品は、昨年オープンした「みやじマリン」の階段踊り場にも展示されている。

### 宮島の舗 ひろ川

廿日市市宮島町大町1-6  
問合せ ☎2504



### 宮島彫り

その特徴は繊細で写実的な装飾彫刻にあると言われる宮島彫り。宮島の風景だけでなく花鳥も彫る。実用品のため彫りは浅く、茶器などを置いても安定している。明治10年に内国勲業博覧会で受賞する職人が出たことから宮島の名産品に。使い込むほどに味が出る。

# 第1章 匠の技

— 1 —  
宮島彫り

先人たちの汗と涙の結晶を誇りを持って守っている—。

さん。彫刻師の道を選んだ。「嚴島神社や鹿を彫るだけが宮島堀りではありません」。花や鳥、風景も彫るといふ。しかし、江戸時代から続く宮島彫り。「ここで見ることのできない風景を彫ってきたからこそ、この時代まで続くことができたんです」。

広川さんの店は嚴島神社のすぐそばにある。宮島で生まれ、宮島で育ち、この年までずっと宮島の景色を見続けてきた。「宮島という風土が育んできたものは、肌にしみ込んでいます」。

立体的に彫り込んでいく「浮き彫り」、内側を切り込んで絵を出す「しずめ彫り」、線だけで自由に描き出す「すじ彫り」は、いずれも伝統技法。この3つの技法を兼ね合わせて、繊細な作品に仕上げている。

お客さんの反応を間近で感じとれるため、40年近くも店頭で彫っていたという。「ビューティフル!」という声をよく聞きますね。外国人の観光客の反応が大きいです」。

宮島彫りは木地を生かすため、比較的塗りや色が少ない。それは「使い込むことによって本物になる」という昔ながらの自然の持ち味を生かし、品格を生む手法を受け継いでいるからだ。また、生活に根ざしてきた彫り

もののため、盆にこれだけ彫刻しても、碗をのせても傾かない。「お茶などがこぼれた場合は、そのまま全体に伸ばして染み込ませるんです。そうして、買った人が使い込んでいくことで、作品が深まっていくんです」。作り方にも使い方にも先人の知恵が詰まっている。

昭和40年代、高度成長を続けた日本では、大量消費、使い捨てといった風潮の中、伝統的工芸産業が危機的な状況を迎えていた。そうした中、昭和49年に「伝統的工芸産業の振興に関する法律」ができ、国による振興策がスタート。「宮島でも、当時の方々が宮島細工協同組合を作り、大切な伝統工芸を次代に引き継ごうとしました。現在、ろくろと杓子、角盆そして宮島彫りが伝統的工芸品に指定されているのは先人達のおかげです」と広川さん。

「熊野筆のように全国展開はできませんが、宮島に来たら作品に出逢えるということを大事にしたいですね」と語る。

「宮島は島全体が美術館だと思っています。この島にあるものはすべて美術品で、宮島彫りもその一つ。世界に誇れる観光地として、見に来てもらえる価値のある島にしていきたいです」。

「ろくろ工房を見に行ったら、鮑くずに埋もれながらも、光り輝く作品があつたんです。それは、今まで見たこともない作品で、素晴らしい宮島の風景が彫ってありました。そう語るのには、伝統工芸士の広川和男さん。その作品こそ広川さんの師である故・大谷一翠さんのも

のだった。当時29歳。大谷さんに心魅かれた広川さんは、師事を願い出る。「大谷さんに出会わなければ、今はありません」と、言い切る。

高校を卒業後、証券会社勤務やもみじまんじゅうの販売などを行っていたが、人と同じことをするのが嫌だったという広川



ひろかわ・かずお  
広川 和男さん  
(69歳・宮島町)

高校を卒業後、いくつかの仕事を経験し、故・大谷一翠(おおたに・いっすい)氏に師事し、彫刻の道に進む。昭和48年第1回宮島特産品振興大会金賞受賞。平成6年、伝統工芸士に認定。自身が営む「ひろ川」で、作品を販売。平成11年、中国通商産業局功労賞受賞。平成17年、経済産業大臣賞受賞など数々の受賞歴を持つ。現在は、宮島伝統産業会館で月2回教室を開き、後進の指導にも力を入れている。

江戸時代後期、甲州(山梨県)の彫刻師、波木井昇斎によって伝えられた木彫り彫刻の技術、宮島彫り—。盆や菓子器などに嚴島神社の風景や猿、鹿などを彫り、木材の素地や木目を生かした彫刻だ。その技を引き継ぐ職人がいる。伝統工芸士の広川和男さんにお話しを伺った。